

第14回映画祭 開幕!! 日本初7作品始め全23作品上映



9月2日(水)から6日(日)の5日間、ウィルあいち(愛知県女性総合センター)を主会場として「あいち国際女性映画祭2009」が開幕。この映画

祭は、中部圏唯一の国際映画祭として1996年から毎年開催され、今年で14回目。

今年は、メインプログラム17本のうち7本が日本初公開

で、日本人女性監督による海外撮影作品(3本)など、ドキュメンタリー作品も充実。オープニング(ウィルホール)では、プ・シヨン監督(韓国)による「今、このままだいい」を、続いて、ノンフィクション作家・門野晴子さん原作、槇坪寿鶴子監督(日本)の「星の国から孫ふたり〜「自閉症」児の贈りもの〜」を上映。

この他、ゲストとフレンドリーに語り合う場として、新たにトークサロンを開催し、日本のドキュメンタリー監督5人を迎え、「女性ドキュメンタリー監督と語る」と題して語り合います。

(9/5(土)17:00~)

また、昨年に引き続き、ソウル国際女性映画祭ディレクターのイ・ヘギョン氏を招き、中国、韓国の監督なども交えて、シンポジウム「アジアの新世代女性監督からの提言」を開催。(9/3(木)16:30~)

さらに、国際フィルムアーカイブ連盟(FIAF)会長の岡島尚志氏を講師に迎え、ワークショップ「世界の「フィルム・アーカイブ」を展望する」を実施します。

(9/6(日)13:30~)

映画祭前日 記者会見開催〜ゲスト10名が作品への思いを語る

昨日、午後3時から開催された映画祭合同記者会見には、国内外のゲスト11名が出席。

映画祭本全ディレクターから、今回上映作品は、「結果として、どの作品からも“家族”が浮かび上がってくる」と、映画祭のコンセプトを説明。その後、10名のゲストが、作品への思いを語った。

▼「チベットの音調」チャン・ルイ プロデューサー

中国は、56の民族が暮らす多民族社会で、チベット民族は歌と踊りが上手です。作品では、すばらしい音楽のほか、チベットの最近の生活の変化や美しい風景が描かれています。この作品を見て、中国、チベットを訪れてほしいと思います。

▼「エスケープ」カトリーネ・ヴィンフェルド監督

日本は初めてで、3時間前に到着したばかり。テンマークの女性ジャーナリストが、アフガンでタリバンに誘拐された後、タリバン青年兵の手助けで脱出に成功するところから映画は始まります。政治的な映画で、メディアの役割の重要性をテーマとしています。

▼ソウル国際女性映画祭イ・ヘギョン ディレクター

今回の映画祭では若い女性監督が多く、女性の活躍が増えてい

ることを大変うれしく思います。女性の眼を通して様々な現象を捉えることが重要で、ますますこの映画祭が発展していくことを願っています。

▼「女のみづうみ」岡田茉莉子さん

川端康成の「みづうみ」が原作で、結婚後初めて撮った、私にとって大事な作品です。今こそストーリーカー問題がよく話題になりますが、この作品は30年も前に追われる人妻を演じた大変スリリングで面白い作品となっています。ぜひ多くの方に観てほしいと思います。

▼「星の国から孫ふたり〜「自閉症」児の贈りもの」槇坪寿鶴子監督

「どんなテーマでも、槇坪さんの映画には夢がある、希望がある」と言ってもらえるよう努めています。「デュワイン」という自閉症児の子供の言葉の意味を想像しながら、あったかい気持ちになっていただければと思っています。

▼「つぶより花舞台」鯨工マ監督

今回の作品は、自分自身が立ち上げた60代以上のアマチュア劇団に焦点を当てたドキュメンタリーです。芝居は人生経験が生きるものであり、年を取ってから始めるのに最高です。若い人にも見てもらいたいです。

▼「あした天気になる〜発達障がいのある人たちの生活記



録〜?」宮崎信恵監督

3年前に観客賞をいただいてから、今の発達障害の様子をもっとしっかり見てほしいという思いで撮りました。思いを分かち合いながら生きている、一人一人が大事にされる社会に変えていきたいという思いを込めて作りました。

▼「空とコムローイ〜タイ、コンティップ村の子どもたち〜」三浦淳子監督

この作品は、2000年にタイの山岳民族の子供たちに出会い、その後、8年間を撮り続けたドキュメンタリーです。お金や親がなくても、周りの大人たちに支えられて明るく生活している子どもたちの姿を見てもらいたいです。

▼「プライアンと仲間たち パーラメント・スクエア SW1」早川由美子監督

今から2年ちょっと前、留学のつもりで行ったイギリスで観光

をしている途中、プライアンに出会いました。プライアンは8年以上も国会議事堂前の広場でテントを張り、反戦・平和活動を続けていました。プライアンと出会い、被写体のもつパワーに惹かれ、それを信じて撮った映画です。

▼「台湾人生」酒井充子監督

11年前に台湾を訪れ、流暢な日本語を話す老人に出会ったことがこの映画を作るきっかけです。老人たちは、日本の台湾統治51年間の最末期に、多感な青少年期を迎え、日本語教育を受けました。一人でも多くの方々に台湾という国や台湾人を考えるきっかけとなる映画になってほしいです。

本日の上映作品&来場ゲスト

※詳しくは映画祭オフィシャルカタログ(1部¥500)をご覧ください。

▼今このままだいい



ソウルでキャリアウーマンとしての階段を昇りつつある妹ミョンウン。故郷の島で魚屋を営みながら一人で子どもを育てている姉のミョンジュ。父親のちがう姉妹は何年ぶりかで会った。母親が突然、亡くなったからだ。

ミョンウンは子どものころ父親に見捨てられたことに深く傷ついていた。「病院へ行く」と言い残して島を出た父は、それっきり帰らなかったのだ。ミョンウンはささやかな手がかりを頼りに、姉を誘って父親探しの旅に出る。

性格も暮らしぶりもまるでちがう姉妹の旅は、ギクシャクしている。けれども、ふたりの心は、やがて寄り添い重なりあっていく。姉はなぜ、便り一つ寄せなかった妹の誘いにのったのだろう。妹は首尾よく父親に会うことができたのだろうか。

(川名紀美 ジャーナリスト、元朝日新聞論説委員)

フ・ジョン監督

1971年、韓国出身。27歳の時に初の短編映画『Spark』を制作。その後、韓国映画アカデミーに入学する。短編『His Humming』(00)が大田インディペンデント・ショートフィルム・フェスティバルでエクセレント・フィルム・アワードを、『A Drop of Clear Salty Liquid』(02)で同映画祭特別賞を受賞し、本作で長編監督デビュー。



▼星の国から孫ふたり～「自閉症」児の贈りもの



「発達障害」、その中の「自閉症」(オーティズム)をご存知でしょうか?

「自閉症」は生まれながらに脳機能に障害、ばらつきがあり、人とのコミュニケーションが苦手

です。しかし早期発見・早期療育によって障害は軽減可能だといわれています。

原作者・門野晴子さんのお孫さん二人(アメリカ在住)が「自閉症」です。その実体験から書かれた『星の国から孫ふたり』を読み、ユーモア溢れる愛情一杯の関わり方に感動した私は、日本の現状に置き換えて、「自閉症」児・者と家族についての理解を深めたいと、映画化に踏み切りました。

主人公バアバ役の馬淵晴子さんは「自閉症の理解を広めるために」と出演を快諾され、「どんな役でもいいから」と友情出演の小林桂樹さん、米倉育加年さん、紺野美沙子さんからは多くの励ましをいただきました。

(槇坪亨鶴子監督)

槇坪亨鶴子監督

1940年、広島生まれ。早稲田大学第一文学部演劇科卒。映画、テレビ、教育映画に18年間スクリーンライターとして携わり、1985年、企画制作会社バオを設立。2000年「老親 ろうしん」で山路ふみ子映画賞福祉賞ほか日本カトリック映画賞、藤本賞特別賞を受賞。主な監督作に「子どもたちへ」(86)、「若人よ」(87)、「地球っ子」(93)、「わたしが SuKi」(98)、「母のいる場所」(03)などがある。



▼ドゥーニャとデジー



日々めまぐるしく変わっていくものと、時が過ぎゆこうと変わらないものがある。二人の女の子がそれぞれの「18歳」の苦しみとともに考え、ともにした冒険でつかんだ幸せは、そのどちらにも支えられたものだった。

保守的なイスラム系移民の子でアンニュイなドゥーニャと、オランダ人で、ユニークでリベラルな家族関係をもつハイパーなデジー。二人のマッチングは一見不可思議だが、移民社会も三世、四世の時代になった現代ヨーロッパの、新たな市民文化の面白さを現している。彼ら自身にとって「ちがうもの」どうしてあること

は、必ずしも壁ではない。逆に「ちがうこと」が与えてくれる刺激と新発見が、自分たちのパワーとなるのをよく知っている。(野中恵子 トルコ研究者・作家)

▼女のみづらみ



©1966 松竹株式会社
不倫相手に撮らせた、裸体写真のネガを奪われた人妻。それ以来、見知らぬ男からの脅迫が始まる。「写真の女」に恋した男と出会った人妻に、やがて新たな感情が生まれる。川端康成の小説を大胆に脚色、虚像と実態に翻弄される人間の心象を、美しい映像で綴った作品。



吉田 豊雄 監督
(元・山梨女子大学文学部助教授)



岡田 茉莉子さん(俳優)
Mariko Okada

▼飛べ、ペンギン



このところ、日本では韓国エンターテインメント産業への関心は高いものの、韓国の人々の抱える問題を共有する意識は決して高くない。しかも、韓国ではこのような社会問題に鋭いメスを入れる作品が少ないのも現実である。

こうした状況下でイム・スルレ監督がメガホンを執った映画「飛べ、ペンギン」は、生の営みに目

を向け、韓国社会が抱える様々な問題点を冷酷ではなく、むしろ心の氷を融解させていくかのように優しく、時に厳しい視点で描いていく。

(根本理恵 放送大学客員准教授、東京大学非常勤講師、字幕翻訳者)

イム・スルレ監督

1960年、韓国・仁川生まれ。漢陽大学で英文学を専攻し、同大学院で映画学を学ぶ。その後、パリ第8大学で映画学の修士号を取得。『スリー・フレンズ』(96)、『ワイキキ・ブラザーズ』(01)で評価を高め、2007年「私たちの生涯最高の瞬間」で国内の映画賞を総なめ。本作は「もし、あなたなら ～6つの視線」(03)に続く韓国人情委員会による映画プロジェクトへの参加となる。



▼イメルダ



この作品はフィリピンのフェルディナンド・マルコス大統領の夫人、イメルダ・マルコスのこれまでを描いたドキュメンタリー作品。これほどまでに「評価の定まった人物」のドキュメンタリーを撮るのは難しかったと思うが、その一方で、フィリピンでの撮影が始まった時点で監督はかなり困惑したのではないだろうか。意外なコトに「庶民レベル」ではイメルダ人気は高いからだ。

これは私自身が初めてフィリピンに渡った時に感じた困惑でもあった。私はイメルダ夫人設立のフィルムセンターに3年ほど勤務していた。夫人は「反体制映画を上映できる国こそ民主主義国家」という独特の信念をお持ちで、また国産映画に対する保護も厚かったこともあり、失脚後ではあったが映画業界における彼女の評価は案外高かった。

(小池 昌 在日外国人情報センター代表)

◆今日・明日のチケット情報/日にち、会場、売行き状況(○余裕有、△残少、×完売)、作品名(上映時間)

◎9月2日(水)

⇒ウィルホール

○「今このままだいい」(10:00)

○「星の国から孫ふたり」(14:00)

○「ドゥーニャとデジー」(19:00)

⇒大会議室

○「女のみづらみ」(10:00)

○「飛べ、ペンギン」(14:00)

○「イメルダ」(19:00)

◎9月3日(木)

⇒ウィルホール

○「チベットの音調」(10:00)

○「エスケープ」(14:00)

△「おくりびと」(18:30)

⇒大会議室

○「羅生門」(10:00)

○「つぶより花舞台」(14:00)

○「今、このままだいい」(18:30)